

まえがき

英国で書店に入り、店内をぐるりと見渡せば、旅行ガイドや犯罪小説にかなりのスペースが割かれていることに気づくが、これらと向こうを張るようにわがもの顔で棚を占拠している、もうひとつのジャンルがある。伝記である。

古代から現代に至るまで、他者の、あるいは自己の一生を記録し、後世に残したいという衝動に突き動かされた書き手が途絶えたことはない。そうした伝記作家たちの執筆意欲を支えてきたのは、他人の生を己の生の拠り所にして生きる、私たち読者の存在である。記された人生を、私たちはある時は生き方の指針を求め、またある時はゴシップを求めて読む。ある時は物語として、ある時は歴史として読む。人の一生は、一時の娯楽として消費されることもあれば、時代が思わぬ意義づけをすることもある。

'biography' という語は、'writing of lives' を意味するギリシャ語に由来し、*OED* によれば、ジョン・ドライデンのプルタルコス『英雄伝』翻訳（1683年）が初出である。だが、それ以前に伝記が書かれなかったかといえば、もちろんそういうわけではない。'biography' という言葉が登場する前には、このジャンルを指す一般的呼称としては主に、'life' が用いられた。1980年代頃から文学批評などにおいて、'life-writing' が好んで採られるようになった。この呼称は主として研究者の間で用いられ、従来の伝記よりさらに広範な対象を包括する。'biography' と聞けば、私たちは書き物として、一定水準の完成度を期待するが、'life-writing' は日記や手紙、航海記録など、書き散らした雑多なメモや散漫な記録をも、その範疇に含むのである。その研究のアプローチ法は文学にとどまらず、歴史学、心理学、社会学、民俗学、ジェンダー学など、'life-writing' は多岐の学問が交叉する、まさに学際的な研究分野となっている。イギリスでは伝記研究の拠点として、オックスフォード大学ウルフソン・コレッジやロンドン大学キングズ・コレッジ、サセックス

大学などが研究センターを設け、IABA (International AutoBiographical Association) のような国際的学術協会も誕生した。

近代初期の伝記を論じた本書もまた、著書に付された前書きや献呈書簡、追悼詩など、狭義の伝記に囚われることなく考察の対象とし、また章ごとに視点を変え、17世紀の伝記を多角的に捉えることを目指した。

本書は3部6章から成る。各部を構成する二つの章は、それぞれ対照的に配されている。第1部は信仰をテーマとする。第1章では、キリスト教徒の手本として語られる殉教者たちの伝記群を児童書の観点から論じ、対する第2章では、信者たちに警告として提示される背教者フランシス・スピラの伝記を、18世紀のデフォールの海賊冒険譚のなかに見出す。第2部は自伝を扱う。第3章では、17世紀にピューリタンによって量産された回心記の代表作であるジョン・パニヤンの信仰記録を扱うが、第4章ではこれとは対照的に、女性作家マーガレット・キャベンディッシュの極めて世俗的な自叙伝を、彼女のロマンス作品「許婚」と共に組上に載せる。近代科学の誕生により、17世紀は伝記に対する意識が大きく変化した時代である。第3部は第5章と第6章で各々、韻文と散文による伝記を対比的に配することで、女の「アイデア」を謳ったジョン・ダンと、「むき出しの真実」にこだわったジョン・オーブリーの二人の伝記的著作の文体の違いが、近代における伝記に対する意識の変容を如実に反映していることを示そうとした。巻末には、マーガレット・キャベンディッシュの自叙伝全訳を附す。

文献からの日本語訳は、すべて拙訳によるものである。引用に際し、第一次文献については、併せて原文を付した。

本書は、以下の科学研究費助成金 (JSPS KAKENHI) を受けた研究成果の一部として発表された論考を中心に加筆・修正を施し、一冊にまとめたものである。

- (1) 研究課題名「近代英国における女性の〈偉人伝〉研究」基盤研究 (C) (2)、
研究代表者：齊藤美和、平成25～27年度、課題番号25370284
- (2) 研究課題名「キリスト教世界における子供の殉教研究」基盤研究 (C)

- (2)、研究代表者：齊藤美和、平成 22～24 年度、課題番号 22520244
- (3) 研究課題名「ヨーロッパの自殺観」基盤研究 (C) (2)、研究代表者：吉田幸子、研究分担者：久野幸子、岡村真紀子、齊藤美和、平成 14～15 年度、課題番号 14510550

ダンの『周年追悼詩』の言葉を借りるならば、本書は諸般の事情で「月足らずで産み落とされ」た。全体的なバランスにおいても、近代初期という時代背景もあって、結果として宗教的な色合いの濃い伝記に偏ることになった。包括的な研究には程遠いが、伝記文学という巨大な魚の、せめてその尾なりとも、掴むことができればと願っている。

記憶の薄暮
—— 十七世紀英国と伝記 ——

目次

まえがき	i
------------	---

第 I 部 鑑としての伝記 —— 殉教と背教 ——

第 1 章 子どもと殉教者伝	2
----------------------	---

殉教者伝とその背景 2

児童推薦図書としての『殉教者列伝』 5

児童版『殉教者列伝』 11

『殉教者列伝』の幼い読者 15

第 2 章 海賊冒険譚のなかの背教者伝 —— フランシス・スピラと『海賊シングルトン』 ——	22
---	----

海賊の自叙伝 22

フランシス・スピラの悲劇 24

絶望の記録 —— 『スピラの悲惨な容体』 —— 26

増殖するスピラ 28

背教者の最期 30

背教者と来訪者 32

悪魔と自殺願望 34

絶望のパラドックス 37

 第Ⅱ部 自伝のわたし語り ―― 信仰と世俗 ――

第3章 獄中の魂の記録 ―― ジョン・バニヤン『溢れる恩寵』――	44
自伝的真実と偽善	44
受難者の演じる魂	51
第4章 マーガレット・キャベンディッシュの〈わたし語り〉	70
I. 前書きの〈わたし語り〉	70
マーガレットの前書き	70
書く有閑夫人	71
出版する女流作家	76
献呈する女学者	79
II. 『自然の素描』における〈わたし語り〉 ―― 自伝とロマンス「許婚」――	84
伝記とロマンス	84
ロマンス作家のアンチ・ロマンス宣言	85
創作と自伝	89
自伝のヒロインとロマンスの〈わたし〉	91

 第三部 伝記の真実 — 記念と記録 —

第5章	無名少女の偉人伝 —— ジョン・ダン『周年追悼詩』 ——	110
	哀悼と伝記	110
	破り取られた伝記	112
	〈処女期〉で終わる完全なる人生 —— 聖女としてのエリザベス ——	115
	〈婚姻期〉と〈寡婦期〉 —— 女体としての「世界」 ——	124
第6章	王立協会と近代初期イングランドにおける伝記観	132
	科学の誕生	132
	王立協会設立と新学問の定義 —— 科学的言説 VS 文学的言説 ——	132
	伝記の伝統とベーコンの伝記観	136
	オーブリーの「ホップズ伝」 —— 経験哲学流伝記事始め ——	140
	参考文献一覧	152
附録	マーガレット・キャベンディッシュ 「著者の生い立ちと生涯についての真実の話」(1656年)	164
	初出一覧	189
	あとがき	190
	索引(人名・作品)	192

第 I 部 鑑としての伝記 —— 殉教と背教 ——

第1章

子どもと殉教者伝

殉教者伝とその背景

今日も書店の児童書コーナーや初等教育機関の図書室の定番である「偉人伝」は、古くから児童教育の役割を担う代表的な文学ジャンルであった。子どもたちの模範として居並ぶ偉人たちの顔ぶれは、まさにその国、その時代の世相を映し出す鏡である。

近代イングランドにおいて、殉教者の伝記は「偉人伝」の核であった。プロテスタント側におびただしい数の殉教者を出したメアリー一世の治世が幕を閉じると、ジョン・フォックス (John Foxe: 1516-1587) の『殉教者列伝』(*The Acts and Monuments* [1563])¹⁾ が出版され、殉教者の受難と栄光を語り伝えた。成人・子どもを問わず、キリスト教徒はこうした殉教者伝を信仰の糧とし、殉教者の言行を様々な場面で想起しては、それを人生の指針とした。殉教者伝が教えるのは、信仰を貫くこと、苦難に耐える堅固な忍耐をもつこと、そして肉体の死に備えることである。殉教者と改宗を迫る迫害者とのあいだのやり取りは、真の信仰とは何かを語り、迫害者によって加えられる拷問は、残虐であればあるほどキリスト教徒に求められる忍耐がいかほどのものかを示し、恍惚として神の名を唱えながら処刑台で息を引き取る彼らの壮絶な最期は、読者に*ars moriendi*の具体的実践例を提供した。

アウグスティヌスは『神の国』において、「その神はわたしたちが神に助けを求め、彼ら殉教者たちの記憶を新たにすることによって、そうした同じような栄誉の冠と勝利を得るべく、彼ら殉教者たちをまねるようにとわたしたちを鼓舞するのである」²⁾と語っている。キリスト教において、殉教者説

話は過去の信仰の戦士たちの単なる記録というだけではなく、これから戦いに赴く信徒たちに精神の訓練を促すためのものであり、それは教化文学の初期の形態であった。シュナイダー (Carl Schneider) は、その起源がヘレニズム影響下にあった後期ユダヤ教の「第四マカバイ記」その他の殉教者物語にすでにみられると指摘する³⁾。中世においては、実際に異端者として処刑された殉教者はその数を減らした。しかしながら、古代ローマ帝国におけるキリスト教徒大迫害期と近代宗教改革のあいだにおいても、人々の殉教に対する崇拜と希求の念は薄らぐことはなかった。キリストの受難の観想などを通じて、殉教者をキリスト教徒の模範とする考え方は、中世にしっかりと根を下ろしていた。それは「放棄されたわけではなく、その姿形を変えただけ」⁴⁾であった。肉体的死を前提とせず、信仰のために忍耐強く苦難を耐え忍ぶ「精神的」あるいは「白い」殉教の実践が説かれ、それは、「実際、もし人間の救いにとって耐え忍ぶにまさって益のあるものがあつたならば、必ずやキリストは言葉と模範でもって、それを示されたであろう」⁵⁾と語るトマス・ア・ケンピスの『キリストにならいて』のような手引書となって結実したのである。

クルティウス (E. R. Curtius) は、キリスト教民間信仰の原動力となった二つの源泉として、殉教者崇拜と聖人崇拜を挙げ、文学的には前者が受難録を、後者が聖人伝 (Hagiography) を生んだとし⁶⁾、両者は互いに混じり合いながら発達するのであるが、近代の殉教者伝もまた、*passio*と*vita*が混淆したジャンルであり、受難録のトポスと手紙や日記、裁判記録などの事実に基づく記述が混在しているのが普通である。伝記というジャンルを語る際に常に意識されるのは事実と虚構の問題であるが、殉教者伝は事実よりも宗教的真実に重きを置く聖人伝の伝統から、記述の正確さは概して度外視され、特に16、17世紀のイングランドにおいては、宗教的・政治的対立を背景にしたプロパガンダとしての性質が顕著であった。エリザベス一世の治世下でプロテスタント国家としての道を歩み始めたイングランドにおいて、フォックスの『殉教者列伝』がナショナリズムの形成に一役買ったことは明らかである⁷⁾。メアリの治世に亡命の憂き目に遭い、いまだカトリックの脅威冷め

やらぬテューダー朝を生きたフォックスにとっては、殉教者の物語が歴史の彼方に震む「伝説」などであったはずはなく、このことが彼の語りを『黄金伝説』の著者ヤコブス・デ・ウォラギネのそれとは異なるものにしてている⁸⁾。『殉教者列伝』はエリザベス女王の即位を殉教の歴史の流れのなかで捉え、聖書や歴史に女王の治世が神意であることの予兆を確認することで、国内外の女王に対抗する勢力を迫害者として糾弾し、個々の雑多な殉教者の伝説的逸話を一つの統一された国家の歴史へと集約して、分裂に陥りかねない正統性の多元性を一元化したといえよう。

殉教が至極身近であった時代には、それは大衆によって目撃されるものであり、また血によって受け継がれるものであった。ジョン・ダンは、『自殺論』(John Donne, *Biathanatos* [1647])の序論のなかで、自らに自殺願望があることを告白し、これは「幼少の頃から、抑圧と受難の宗教を信仰し、死を蔑むことを常として殉教を想像してはそこに心を致している人たちと共に生き、交わってきたから」(“because I had my first breeding, and conversation with Men of a suppressed and afflicted Religion, accustomed to the despite of death, and hungry of an imagin'd Martyrdome”)⁹⁾であろうと、自殺に傾きがちな自身の心的傾向には、カトリック殉教者の家系に生まれたことが影響しているのではないかと自己分析を展開する。一方、ジョージ・フォックスのようなクエーカー教徒もまた、『日誌』(George Fox, *The Journal* [1694])における冒頭の自伝的述懐のなかで、母方の家系に殉教者を出していることを誇らしげに告げる¹⁰⁾。「殉教」が事実上廃止され、もはや歴史の彼方に退いてからも、過去の殉教者たちは、イングランドがカトリック勢力の脅威に晒されるたびに、鮮やかに復活してきた¹¹⁾。揺るぎない信仰を翳し、歓喜のうちに炎に包まれる殉教者たちの物語を、後世の人々は戦慄と興奮、そして憧れをもって読んだ。20世紀初頭になっても、『殉教者列伝』の「ぞっとするような殉教の版画」(“the gruesome woodcuts of martyrdoms”)に恐怖と興奮を覚え、自分はこうした殉教者の末裔のひとりではないかという妄想に取り憑かれた少年もいた¹²⁾。殉教者の家系に生まれる榮譽に浴していない者も、また、殉教が遠い過去の歴史となって以降も、人々は物心がつくかつか

ぬかのうちに殉教者の物語に親しんでいた。殉教者伝は、ナショナリズムの形成（後にはその高揚）のための単なる道具ではない。それは人々の精神のより奥深いところに働きかけてきたのである。

児童推薦図書としての『殉教者列伝』

近代においては、児童書というジャンルが現代のように確立していなかったため、大人と子どもの読む書物を区別する境界線は曖昧であった。そのようななか、フォックスによる『殉教者列伝』は子ども向けに書かれたわけではないが、近代社会において子どもに適した教育書とみなされ、聖書と並んで広く読まれるに至ったことについては、多くの児童文学史家が論じている¹³⁾。『殉教者列伝』は1563年の英訳版出版以来、何度も版を重ね、多くの教区教会には聖書とともにこれが備えられ、牧師は説教でしばしばその一節を引用したため、信徒にとってはごく身近な書となった。また、子どもたちは教会だけではなく家庭においても、『殉教者列伝』に親しんでいたと思われる。プロテスタントの家庭においては、日曜には家族が広間に集い、一家の主人が家族や使用人たちを前に聖書からの一節を読み聞かせるという慣習があったが、聖書以外にも『殉教者列伝』がこのような場で用いられたことは、ある女性の1599年9月の日記からも知れる¹⁴⁾。とはいえ、『殉教者列伝』が児童書としてまともに論じられることはまれであり、児童文学の揺籃期についての議論のなかで軽く触れられるにとどまっている。スローン(William Sloane)のいうように、「フォックスの書は……その定義を強引に拡大解釈することによってのみ、児童書と呼ぶことができよう」¹⁵⁾というのが、一般的な見方であろう。しかしながら、児童書とみなすかどうかは別として、実際に子どもたちが『殉教者列伝』に様々な形で親しんでいたという事実を重くみるならば、それが若い読者の精神形成に与えた影響、そして近代の児童書に与えた影響の大きさは、強調してもし過ぎることはないだろう。

殉教者の物語が教化文学の祖とみなされてきたことについては前に述べたが、フォックス自身もまた、自らの仕事のねらいが「教化」にあることを明

らかにしている。『殉教者列伝』の効用を論じた序論において、彼は書の目的が殉教者の顕彰のみならず、宗教的教導にあると述べる。いわく、それは「単に読むためではなく、倣うため」(“not alonely to reade, but to follow”)の書であり、我々の時代の殉教者は「人々の生活を矯正したその成果」(“the fruite that they brought to the amendement of mens liues”)を考えてみても、原始教会の殉教者たちにいささかも劣るところはない(TAMO 1563: 15-16)。さらに、カトリック信者たちに向かって語りかけた序論(“To the Persecutors of Gods truth, commonlye called *Papistes*”)において、「世界のいたるところで大学や学校がそなたたちに対抗し、若者たちがそこで徹底して教育されるならば、とてもそなたたちのかなう相手ではなくなるであろう」(“Vniuersities and schooles in al quarters be set vp againste you, and youthe so trayned in the same, that you shal neuer be able to matche them” [TAMO 1563: 14])と語気を強めて宣告するフォックスは、カトリック勢力の拡大阻止に若者の教育がいかに重要かを認識しており、引用からは、『殉教者列伝』の出版がその一翼を担うはずであるという、彼の自負が感じられるのである。

フォックスが、当初ラテン語で著わした『殉教者列伝』を亡命先であるパーゼルから帰国したのちに英語に翻訳して出版したのは、読者層を広く一般大衆に広げるためであったが、版画や欄外注などにおいて工夫を凝らした結果、若年層にも親しみやすいスタイルとなった。特に、吹き出しのついた版画が文字の読めない幼子の心を捉え、視覚的効果でもって彼らの想像力に訴えかけたであろうことは、想像に難くない。ウッデン(Warren W. Wooden)は、こうした工夫が結果的に『殉教者列伝』の読者を子どもにも押し広げる一因となったばかりではなく、そもそもフォックスが「若年層をも、主たる読者として想定していた」ことを論証しようと試みる¹⁶⁾。フォックス自身がどの程度、読者として子どもたちを念頭に置いていたかについては議論の余地があるだろうが、大人たちがこれを子どもに読ませるに適した書であると考えたことは疑いようがない。事実、近代イングランドにおいて、『殉教者列伝』はプロテスタントの子どもたちの必読書であった¹⁷⁾。たとえば、1579年にはトマス・ソルター(Thomas Salter)が、読み書きを覚

えたばかりの子どもに低俗なバラッド本などを与えて感化するような親に疑問を呈し、子どもには聖書や『殉教者列伝』、子どもの手本となるような信心深く徳の高い人物の伝記といった、「教導と魂の健康」のために書かれた書を読ませるべきであるとしている¹⁸⁾。児童書の先駆けとして必ずそのタイトルが挙がる17世紀のトマス・ホワイト『幼子のための小冊』(Thomas White, *A Little Book for Little Children* [1702])もまた異口同音に、『殉教者列伝』をバラッドと対比させつつ、徳育に相応しい書として子どもたちに薦める(17-18)。子どもの教育にあたる親たちへの指南書ともいえるべき『貧者のための家庭書』(*The Poor Man's Family Book* [1674])や『家庭の信仰問答』(*The Catechizing of Families* [1683])などを著したりチャード・バクスター(Richard Baxter)は家庭教育を重要視し、ピューリタン牧師であった彼は、青少年をキリスト者としての正しい人生に導くために『青年への勧告』(*Compassionate Counsel to All Young Men* [1681])を出版して、若者の教化を図る。その第八章において、彼は青少年に十項の信仰の指針を示すが、その第五の指針では、神の法を真に知るために読むべき書について、こう語る。「何か有益な歴史、特に模範となる人物の伝記や、そうした人物の生涯を明らかにする追悼説教を読むことは、役に立つはずである」(“And it will not be unuseful to read some profitable history, especially the lives of exemplary persons, and funeral sermons which characterize them.”)¹⁹⁾。続いてバクスターは、具体的に推薦書のタイトルを挙げていくが、そのなかにはサミュエル・クラーク(Samuel Clark)やトマス・ビアード(Thomas Beard)の著作と並んで、やはり『殉教者列伝』が示される。このように、17世紀においてすでに『殉教者列伝』は児童推薦図書としての地位を確立していたが、それは後世になっても不動であったようだ。プロテスタントのあいだでは16、17世紀からすでに子どもの「魂の健康」のためにと、特に貧しい子どもや優良な生徒に賞品として書物、特に聖書や教義問答集を与えることが好まれたが、その慣習が定着したヴィクトリア朝も末の1900年に、ある日曜学校で出席率の良い学生に褒美として『殉教者列伝』が与えられたという記録が残っている。「なんとという不朽の持ちの良さか」とは、ダートン(F. J.

Harvey Darton) が思わず漏らした感想であるが、『殉教者列伝』は出版以来、子どもが親しむに相応しい良書として評価され続けてきたわけである²⁰⁾。

そもそも、『殉教者列伝』が主たる読者として子どもを想定していたとウッデンが考える根拠の一つは、そこに登場する幼子の存在である。模範とすべき幼き殉教者たちとして、大迫害期の処女殉教者エウラリアやアンティオキアの聖ロマヌスと共に殉教した幼き聖バルラスをはじめ、イングランドのジョン・ローレンスやウエールズの漁師ローリンズ・ホワイトらの物語が、『殉教者列伝』には含まれる。さらには、列伝にはこうした手本となる幼き殉教者とは逆の、忌まわしき子どもの例も提示されており、キリスト教の教えを説いた教師に暴行を加えて殺害する生徒の逸話や、親のプロテスタント信仰をカトリック側権力者に密告する子どもの伝記が含まれる。教室で神を冒涇した十二歳のデニス・ベンフィールドという少女については、欄外注において、こうした不敬な子どもには天罰が下ることが告げられ(“Blasphemy punished”)、彼女が「教訓」(“lesson”)として幼い読者に示されていることが明らかにされる(「それゆえすべての少年少女たちよ、この卑劣で愚かな娘を教訓とせよ」)²¹⁾。17世紀には背教者の例をカタログ化した「裁きの書」(Book of Judgment)が盛んに編まれたが、これは殉教者列伝のいわば裏ジャンルである。殉教者伝が神に対して教徒はいかにあるべきかを示し、殉教によって神の救済を確かなものにするさまを例示するとすれば、「裁きの書」は神に背く行いをした者が結果、どのような報いを受けるかを、聖書や歴史上の人物をカタログ化して示す書であり、『殉教者列伝』のネガの部分に独立したジャンルであるといつてよかろう。あるいは殉教者伝と裁きの書は、「鑑(mirror)の書」としてひとつのジャンルと捉えることもできるだろう。殉教者という鑑に自らを映してそれに倣うよう奨励し、逆に背教者という鑑に映し出される神の怒りに目を向けさせ、不信仰に警告を発する。クラークの『聖人と罪人の鑑』(Samuel Clarke, *A Mirrour or Looking-Glasse both for saints and sinners: wherein, by many memorable Examples is set forth, as Gods exceeding great mercies to the one, so his severe judgements upon the other* [1646])はその典型であり、表題にこのジャンルの本質が凝

縮されている。1671年版の表紙の版画には、「バビロン」と「真の教会」がそれぞれ上部左右に対置されている。司教らしき人物たちがその周りに集う左のバビロンの教会は、傾き、倒れかかっている。中央には鏡が据えられ、それぞれの教会に属する者が覗き込んでいる。右側の人物はしっかりと鏡に目をやるが、左側の人物は額に手を当てて下を向き、絶望しているようである。*General Martyrologie* (1651)の著者でもあるクラークは、フォックスの影響を強く受けており²²⁾、図を縦割りにして左右にカトリックとプロテスタントを対照的に配す趣向自体、1563年版『殉教者列伝』の口絵を想起させるものである。クラークは書のなかで救われる者と滅びる者、つまり表題にあるように、聖人と罪人それぞれについて項目別に章を立て、聖・俗双方から例を挙げる。

こうした「鑑の書」の児童向け版とみなすことができるのが、たとえば『子どもたちのための鑑』(*Looking Glass For Children* [1673])といったタイトルが付された書である。做うべき敬虔な子どもと戒められるべき不敬な子どもが対比的に例示され、幼い読者がそこに自らの姿を映し出し、敬虔深くあるかどうか、自己点検するように意図されている。「鑑の書」としての『殉教者列伝』はまた、17世紀児童書のベストセラーともいべきジェイムズ・ジェインウェイの『子どもたちのためのしるし』(*James Janeway, A Token for Children* [1671; 1672])の出版をも、促したのではないかと考えられる。ハント (Peter Hunt) はジェインウェイが前述のホワイトの『幼子のための小冊』に着想を得たのではないかと指摘するが²³⁾、この書もまた、推薦図書として『殉教者列伝』を読むよう、子どもに勧めていることから、当時の類似書の根底に『殉教者列伝』があったことがうかがえるのである。さらに直接的な『殉教者列伝』の影響がみられる箇所としては、手本とすべき少年少女のひとりとして、〈事例八〉にジョン・サドロウという「『殉教者列伝』を読むことに熱中するあまり、食事もそこそこに書に向かう」(“He was hugely taken with the reading of the Book of *Martyrs*, and would be ready to leave his Dinner to go to his Book” [Boston, 1771: 49]) 少年が紹介されるのである。『子どもたちのためのしるし』が実例として示す子どもたちは、

殉教ではないものの、例外なくみな、幼くして命を落とす。ピューリタンにとって聖書が子どもに読ませるべき第一の書であったことは断わるまでもないが、敬虔な生活を送っているかどうか、常に良心に照らし自己点検を迫られていた彼らにとってみれば、子どもに対して神の福音を説き、宗教的自覚を促すための方策として、身近な同年代の「選ばれた子」と「呪われた子」の例を示し、彼らに照らして自らの行いを精査するよう幼い心に働きかけることが、より有効であると思われたのではないかと考えられる。

児童向けの教育書という観点から見た場合、確かに殉教者伝には、読者と同年代の子どもたちをヒーローとして描くことができるという、他の英雄伝にはない利点がある。剣を手に戦うことができない女・子どもは、英雄伝からは弾き出される存在であったが、その受け身の攻撃性ゆえに、無力な彼らも殉教者としては英雄たりえたからである。『子どもたちのためのしるし』に類する児童向け読本には、夭折した子どもらに加え、幼い殉教者たちが取りあげられることが、ままあった。「マカバイ記」の七人の息子とその母や聖エウラリア、七歳の聖バルラスなどが、その例である。なかでも七人の息子と母の逸話は、オリゲネス『殉教の勧め』第三部で若者の殉教の手本とされており、児童書においても繰り返し語られる定番の殉教者伝となった。「マカバイ記」において、律令学者で長老であるエレアザルの殉教に続いてこの親子の殉教が語られるのは、ユダヤの民が自らの模範となる人物を見いだすことができるように、殉教者のタイプに多様性をもたせようとしたためであろう。この逸話はキリスト教会でもよく知られ、カトリック、プロテスタント、アナバプティストを問わず語り継がれてきたが²⁴⁾、七人の兄弟が順に、そして最後に母親が拷問にかけられるという物語展開は、反復やそれにより徐々に高まる善悪の緊張関係といった童話の要素を備えており、近代の児童書でも繰り返し用いられてきた逸話である²⁵⁾。『子どもたちのためのしるし』の人気にあやかってか、1709年か、おそらくそれ以前に出版された『若者のためのしるし』(A Token for the Youth) (作者未詳)は、『子どもたちのためのしるし』を含む他の児童書からの抜粋の継ぎ接ぎという体を取った書であるが、冒頭には七人の息子と母をはじめ、聖バルラスや三人の

処女聖人アグネス、カエキリア、テオドラといった、『子どもたちのためのしるし』にはなかった幼い殉教者たちについての記述が据えられている。このことは、「敬虔な子」の極限にあるのは殉教であると、当時の人々が自然に理解していたことを示しているといえよう²⁶⁾。

児童版『殉教者列伝』

『殉教者列伝』が児童推薦図書として定着する過程において、子どもを念頭に置いた新たな版が現れる。そもそも、二折版の大冊で高価なオリジナル版が流通に不向きであったのは、明らかである。ハラー(William Haller)は、版を重ねた『殉教者列伝』が17世紀末までには一万部ほど出回っていたのではないかと述べているが²⁷⁾、教会に備えつけられるだけではなく、個人で購入する読者を想定して価格を抑え、冊子も四折版、さらには十二折版のサイズに収めた版が出回るようになり、こうした縮約版は読者層を一気に広げる役目を果たしたのである²⁸⁾。さらに18世紀には、ニコルソン(Eirwen Nicholson)らが「劣悪」(“bastard”)版と呼ぶところの、大衆向けの版が広がりを見せる²⁹⁾。19世紀になると、反カトリック気運に後押しされ、『殉教者列伝』人気が再び爆発的に高まった。ハントは『殉教者列伝』の異なる版がおよそ三十も世に出、そのなかには子どもたちが日曜学校で使うために刷られたものもあったと指摘する³⁰⁾。

様々な縮約版のなかには、単に「嵩を減らした」だけではなく、聖書と同様、子どもの読者に配慮した文体や趣向がみられる版が存在する。例えば、17世紀には“Water Poet”こと、ジョン・テイラー(John Taylor)が、『殉教者列伝』を238の対句にまで凝縮し、六十四折版の手のひらサイズのミニチュア本『殉教者の書』(*The Booke of Martyrs* [1616])として出版している。テイラーはこれを、読むための本というよりは「愛でる本」(カスタンの言葉を借りるならば、“a curiosity piece”³¹⁾)として世に出したという考え方もできよう。しかしながら、詩が子どもを惹きつけ、記憶を助ける教育に適した形式であることは、アイザック・ワッツ(Isaac Watts)を待たずとも認識されていた。もちろん、殉教者たちの受難を芸術的形式に昇華する試みとし

て、スペイン詩人プルデンティウスの『殉教歌』(Peristephanon)のように、古くから殉教録のテキストはその詩的翻訳がなされてきた。しかし、テイラーの場合、個々の殉教者に対してはほとんど関心が払われておらず、むしろ殉教の歴史を概観する淡白な内容である。この縮約版『殉教者列伝』出版以前に、彼は子ども向けの聖書のミニチュア本(いわゆる“thumb bible”)のはしりである *Verbum Sempiternum* (1614) を手掛けて聖句の韻文化を試みており、彼の『殉教者の書』はこの仕事の延長線上にあると考えてよからう。

子どもを念頭に置いた『殉教者列伝』の縮約版は、途切れることなく出版され続けた。19世紀には Jetta S. Wolff, *Stories from the Lives of Saints and Martyrs of the Church Told in Simple Language* (1890) や、童謡作家として児童文学史に重要な位置を占めるアンとジェインの父であり、『児童版天路歷程』(*Bunyan Explained to a Child* [1824]) を著したことで知られる版画家アイザック・テイラー (Isaac Taylor) による『児童版殉教者伝』(*A Book of Martyrs for the Young* [1826]) が出版されている³²⁾。しかしながら、縮約版『殉教者列伝』はこのように単独で出版されるよりは、児童向け読本の一部に組み入れられるというケースのほうが多く見受けられる。この場合、膨大な『殉教者列伝』からごく限られた殉教者が選び出され、記述も極度に簡略化される。たとえば、カトリック陰謀事件の最中に出版された Benjamin Keach (?), *The Protestant Tutor. Instructing Children to Spel and Read English* (1679) は、冒頭の献呈書簡のなかで、国の子どもたちに有害な影響を与えているカトリック側の児童向け読本に対抗する狙いがこの書にあることを明らかにする。アルファベットや音節、綴り、聖書からの抜粋、教義問答といった基本的な教材とともに、メアリ女王の治世、アルマダの海戦、火薬陰謀事件、さらにはエドモンド・バリー・ゴドフリーの変死といった出版直前の事件に至るまでの、反カトリック的スタンスを明瞭に打ち出した歴史的記述に混じって、「イングランドの殉教者および国王小史」(98-117) と題されたパートがある。歴代の王の治世に沿ってローマとの対立を軸に殉教者を挙げていくが、イングランドの歴史の流れのなかに殉教者たちを据えるこのスタイルは、『殉教者列伝』のそれと合致する。というのも、フォックスはデ・

ウォラギネというよりは『教会史』(*Historia Ecclesiastica*)を著したエウセビオスの後継者という意識で『殉教者列伝』を著したのであり、『殉教者列伝』は単に独立した個々の殉教者の物語の集成ではなく、イングランドにおける宗教史を大陸のそのなかに位置づけながら、国の世俗の歴史と連動する形で描き出す歴史書なのである³³⁾。児童向け読本のなかの殉教者伝は、小規模ながらも、『殉教者列伝』のこの歴史書としてのスタイルを保っているのである。

殉教者たちがこのように「群れ・総体」として示される一方で、単独で好んで取り上げられる殉教者もいる。その一人は、ジョン・ロジャーズである。フォックスは彼のことを「メアリ女王の治世において苦難を経験した、祝福されたすべての殉教者のなかの最初の原-殉教者であった」(“the first Protomartyr of all that blessed company that suffered in Queene Maries time” [TAMO 1570: 1703])と記す。ロジャーズは、彼のあとに続く同じく聖職にあった殉教者たちはもとより、メアリ治世下の全ての殉教者たちの範として示される。フォックスの記述は、ロジャーズの審問の様子について本人が書きつけた記録に依拠しているが、これは処刑後、牢獄の片隅に残されているのを、彼の妻と息子が見つけたとされる (TAMO 1570: 1702)。家族の存在は彼の殉教を特徴づける要素の一つであり、あとに残されることになる妻と十一人の子どもたちへの気遣い、焚刑に処される前に妻と短い言葉を交わしたいとの彼の申し出が却下されたこと、そして処刑場のスミスフィールドへ向かう道中、妻と乳飲み子を含む十人の子どもたちと出会うシーンの記述などは、読む者の心に訴えるが、フォックスはそれによって不撓不屈の殉教者のイメージを壊すことは避け、家族愛から心を乱すことなく信仰を貫くロジャーズ像を築く³⁴⁾。彼が処刑を待ちながら子どもたちに書き残したとされる *The Exhortation of Mr. Rogers to His Children* (1559) に含まれる辞世の唄は、単独のみならず、ジョン・ブラッドフォードの“the complaint of veritie”と併せてパンフレットの形で出版されたり (*The Complaynt of Veritie made by John Bradford. An Exhortacion of Mathewe Rogers* [1559])、あるいはアメリカでは *The Protestant Tutor for Children* (Boston, 1685) や *New Eng-*

land Primer (Boston?, ca.1700) といった子どものための教本に好んで取り入れられたりしている³⁵⁾。「子どもたちよ、わが言葉に耳を傾けよ／……／わが法をその心にとどめ／記憶に刻め」(“GEue eare my children to my words, /.../ Lay vp my lawe within your harte, / And printe it in your thought.”) に始まる冒頭から、この辞世の唄が訓戒として子どもたちの胸に刻まれるようにと意図されていることは明白であり、父の死後、これを座右の書とし、彼のあとに続くようにと子らに促す。

おまえたちにこの小冊を残そう
みれば心にこの父の
顔が思い浮かぶよう
わが身がこの世、去りしとき。
I leaue you heare a lytle booke,
For you to loke vpon:
That you maye se your Fathers face,
When I am deade and gone. (TAMO 1563: 1332)

スローンは、17世紀の児童書は主に三つのカテゴリーに分けられると考える。民話、教訓書、そして宗教書である。二つ目のカテゴリーのなかには、「作法文学」(courtesy literature) と呼ばれるところの伝統的ジャンルが含まれるが、そのもっとも好まれた形態として、親が子に施す処世訓が論じられる³⁶⁾。親の説諭は、ことに臨終の床という場面において、重みを増すであろう。出産により母親が命を落とす割合の高かった時代には、自らの死を覚悟して出産に臨む母親が、生まれてくる子に人生の指針を書き残すといったことがままあった。死後、出版されて版を重ねたものもあり、死に逝く母から子への教訓というスタイルが、人々の心を惹きつけるものであったことがうかがえる³⁷⁾。そして、産室とともに処刑場もまた、教訓書を生み出す場であった。処刑を控えた者が肉親らに残した辞世の言葉は、ブロードサイドに刷られ、処刑見物にやってきた野次馬が記念に「みやげ」として持ち帰ったというのが、自らの死を覚悟した親から子への最期の箴言というテー

マは、チャップブックの定番のひとつでもある³⁸⁾。ワット (Tessa Watt) は近代初期における廉価本を論じた研究のなかで、こうした書き物の原型にソロモンの箴言があると指摘し、「教えを施す賢明なる父」として、ソロモンという聖書中の人物に次いで権威あるモデルであったのが、プロテスタント殉教者であったとして、ごく初期の例としてロジャーズを取りあげる³⁹⁾。彼の辞世の唄で説かれている内容は、カトリックへの敵愾心がむき出しになった箇所があるものの、肉慾や高慢を諫め、貧しき者に施すことといった、ごく一般的なキリスト教的モラルが語られており、それ故にこの詩が長く児童書のなかで引用され得る普遍性をもつことになったと思われる。

『殉教者列伝』の幼い読者

これまで論じてきたように、大人は殉教者伝を子どもの教育に資すると考え、推薦書として子どもたちに薦めたり、児童向け読本の一部に盛り込んだりした。では、読者である子どもたちは、殉教者伝をどのように受容したのであろうか。

メイグス (Carnelia Meigs) は、初期児童文学において『殉教者列伝』が揺るぎない位置を占めていたことについてははっきりと認めながらも、大人が子どもに読ませたがったのであって、児童が進んで読んだという記録はないと主張する⁴⁰⁾。だが、これはあまりに独断的な見解ではないだろうか。本当に殉教者伝を進んで読むような子どもはいなかったのであろうか。メイグスは、幼い子どもには殉教シーンの残虐性が耐え難かったであろうと考えているようである。しかしながら、マザーグースやグリムなどをはじめとする児童文学のもつ暴力性についての研究が進んだ今日では、むしろ *Oxford Companion to Children's Literature* の次のような主張のほうが、より受け入れられるであろう。「その身の毛もよだつ処刑の記述にもかかわらず (いや、恐らくそれゆえに)、特に殉教者と迫害者の対話における生き生きとした読みやすい文体は、即、若い読者を惹きつけるものであった」⁴¹⁾。あるいは、ハントの次の見解——「子どもたちは (フォックスの『殉教者列伝』を) 小気味よい語りと対話、そして何よりも版画のぞっとする威力に惹きつけら

れて、よく読んだ」⁴²⁾——に要約されているように、『殉教者列伝』には子どもたちを惹きつける要素が多分にあった。『イングランドの名士伝』(*The Worthies of England* [1662]) を出版して各地方の名士の略伝を紹介したトマス・フラー (Thomas Fuller) は、幼少の頃に『殉教者列伝』の版画を目にして心奪われた、まさにこうした子どもの一人であった⁴³⁾。

だが、特に興味深いのは、少女に与えた殉教者伝の影響である。八歳でこの世を去った娘サラ・キャム (Sarah Camme) の短い一生を綴った伝記 *The Admirable and Glorious Appearance of the Eternal God* (1684) のなかで、クエーカー教徒の両親は、娘が読み書きができるかできないかの年頃でもう、『殉教者列伝』の一節を暗記していたと記録する⁴⁴⁾。一方、子どもに『殉教者列伝』を薦める親と、その書に強く感化され、幼心に殉教願望を募らせる子どもの姿を詳らかに描いた19世紀の例として注目したいのは、*The Christian Lady's Magazine* 等の編集を手掛け、1837年に『殉教者列伝』の縮約版を出版したシャーロット・エリザベスの『回想録』(Charlotte Elizabeth, *Personal Recollections* [1841]) の一節である。少女期の回想によると、内容は理解できなくとも絵は見られるだろうとあって父親が渡してくれたフォックスの『殉教者列伝』の版画を、シャーロットは何時間も飽きることなく書に覆いかぶさるようにして「胸を高鳴らせながら、目がチクチク痛むまで」(“with aching eyes and a palpitating heart”) 食い入るように見つめ、ついには「ほおを紅潮させて」(“with burning cheeks”) 父親を見上げ、こう尋ねたという。「パパ、私、殉教者になっていい？」(“Papa, may I be a martyr?”)⁴⁵⁾ 殉教に激しく憧れる少女たちにとって、迫害の時代と比較したとき、今の安穏とした信仰生活が耐え難く映ったことであろう。同じくヴィクトリア朝に生を享けたアニー・ベサントは、『自叙伝』(Annie Besant, *An Autobiography* [1893]) のなかで、子ども心に生まれてくるのが遅すぎたと、いつも悔やんでいたと回顧する。

私はキリスト教の初期の殉教者の物語を読んで、こんなにも遅れてどのような受難もありえない時代に生まれたことを、激しく嘆いた。私はローマの裁判官

やドミニコ修道士の審問官の前に自分が立ち、ライオンに向かって投げ出されたり、拷問にかけられたり、火焙りにされる白昼夢に何時間も耽ったものだ。……だが、いつもはとして現実に返ると、そこには為すべき英雄的行為も、立ち向かうべきライオンも、挑むべき裁判官も存在せず、ただ、なにがしかの退屈な勤めがあるだけであった。すでに偉業はすべて為されたあとであり、この時代には新宗教のために説教をしたり、苦難を味わったりするチャンスはないのであって、自分は生まれてくるのが遅すぎたのだと、苛立ちを覚えた。

I read tales of the early Christian martyrs, and passionately regretted I was born so late when no suffering for religion was practicable; I would spend many an hour in daydreams, in which I stood before Roman judges, before Dominican Inquisitors, was flung to lions, tortured on the rack, burned at the stake; . . . But always, with a shock, I was brought back to earth, where there were no heroic deeds to do, no lion to face, no judges to defy, but only some dull duty to be performed. And I used to fret that I was born so late, when all the grand things had been done, and when there was no chance of preaching and suffering for a new religion.⁴⁶⁾

彼女の殉教への憧れには、形骸化した宗教への落胆と、英雄になり損ねたという少女の苛立ちが垣間見られる。

イングランドでは、1829年にカトリック解放令が可決したことで高まった反カトリック感情が、1850年の俗にいう「カトリックの侵略」(Papal Aggression)でピークに達した。カトリックの脅威が声高に叫ばれるなか、蘇ったのはメアリ女王治世下のプロテスタント殉教者たちであった。この時期、アン・アスキューやローズ・アリンといったメアリ治世下の女殉教者の伝記が相次いで小説化され、カトリックによるプロテスタント迫害が遠い過去の歴史ではなく、今まさに直面している危機であることを告げた。バースタイン (Miriam Elizabeth Burstein) が「宗教改革物語」(“reformation tale”)と呼ぶところのこうした歴史ロマンスは、やはりフォックスを典拠としているが、主な書き手は女性であり、たいていはthe Religious Tract Societyのようなごく限られた出版社から、安価、もしくは無料で配布され、読者として

は少女たちが想定されていたと思われる⁴⁷⁾。アニー・ベサントが「生まれてくるのが遅すぎた」と地団太を踏んだように、こうした女殉教者の伝記を読んで殉教に憧れた少女たちもいたことであろう。殉教者伝においては、少女たちも等しく英雄の扱いを受ける。殉教とは女性が伝統的なジェンダー規範を超えてなお、賞賛的となる稀有な行いであり、勇敢な女たちの姿を余すところなく伝える殉教者伝から、少女たちは他の教育書や小説からは得られない興奮を得たに違いないのである。

注

- 1) 各版からの引用は、主に以下に依る。Mark Greengrass and David Loades, *John Foxe's The Acts and Monuments Online* (以下、引用に際しては、TAMO と略記) U of Sheffield www.johnfoxe.org/
- 2) 『アウグスティヌス著作集』第12巻「神の国」(2) 茂泉昭男・野町啓訳(教文館、1982年) 234頁。
- 3) 佐藤吉昭『キリスト教における殉教研究』(創文社、2004年) 118頁。
- 4) Brad S. Gregory, *Salvation at Stake: Christian Martyrdom in Early Modern Europe* (Cambridge, Mass.: Harvard UP, 1999) 50.
- 5) トマス・ア・ケンピス『キリストにならいて』池谷敏雄訳(新教出版社、1984年) 99頁。
- 6) Ernst Robert Curtius, *European Literature and the Latin Middle Ages* [1948], trans. Willard R. Trask (Princeton: Princeton UP, 1990) 425.
- 7) William Haller, *Foxe's Book of Martyrs and the Elect Nation* (London: Ebenezer Baylis and Son, 1967), esp. Ch.VII.
- 8) Helen C. White, *Tudor Books of Saints and Martyrs* (Madison: U of Wisconsin P, 1963) 140.
- 9) John Donne, *Biathanatos* [1647], ed. Ernest W. Sullivan (London: U of Delaware P, 1984) 29.
- 10) George Fox, *The Journal* (London: Penguin Books, 1998) 3.
- 11) 18世紀における反カトリシズムと『殉教者列伝』については、Colin Haydon, *Anti-Catholicism in Eighteenth-Century England, c.1714-80: A Political and Social Study* (Manchester: Manchester UP, 1993) 131-161.
- 12) Margaret Aston and Elizabeth Ingram, "The Iconography of the Acts and Monuments," *John Foxe and the English Reformation*, ed. David Loades (Aldershot: Ashgate Publishing, 1997) 67-68.

- 13) William Sloane, *Children's Books in England and America in the Seventeenth Century* (New York: King's Crown P, 1955) 50; Cornelia Meigs, Anne Thaxter Eaton, Elizabeth Nesbitt and Ruth Hill Viguers, *A Critical History of Children's Literature* (New York: Macmillan Publishing, 1969) 38-39; Jane Bingham and Grayce Scholt, *Fifteen Centuries of Children's Literature* (London: Greenwood P, 1980) 66; Peter Hunt, *Children's Literature: An Illustrated History* (Oxford:Oxford UP, 1995) 21; Peter Hunt, ed. *International Companion: Encyclopedia of Children's Literature* (London: Routledge, 1996) Vol.1: 241.
- 14) Andrew Cambers, *Godly Reading: Print, Manuscript and Puritanism in England, 1580-1720* (Cambridge: Cambridge UP, 2011) 90-92.
- 15) Sloane, *Children's Books*, 89n4.
- 16) Warren W. Wooden, *Children's Literature of the English Renaissance* (Lexington: U P of Kentucky, 1986) 8.
- 17) Bingham and Scholt, *Fifteen Centuries of Children's Literature*, 66.
- 18) Sloane, *Children's Books*, 9-10.
- 19) Richard Baxter, *The Practical Works of Richard Baxter*, 4vols. (London:1838) 4: 17.
- 20) F. J. Harvey Darton, *Children's Books in England: five centuries of social life* (Cambridge: Cambridge UP, 1982) 324.
- 21) Wooden, *Children's Literature of the English Renaissance*, 78-83.
- 22) Patrick Collinson, "John Foxe and National Consciousness," *John Foxe and his World*, ed.Christopher Highley and John N.King (Burlington: Ashgate, 2002) 31.
- 23) Hunt, *Children's Literature*, 21.
- 24) Gregory, *Salvation at Stake*, 123.
- 25) 七人の息子と母の物語は、その版画もしばしば再利用されたようである。Darton, *Children's Books in England*, 54.
- 26) Samuel Crossman, *The Young Man's Calling* (1678. *Young Mans Monitor* [1664] の改題) には、これを出版した編集者ナサニエル・クラウチ (Nathaniel Crouch) が他の出版物から借用して付け加えた「立派な少年少女の伝記についての記録」と見出しのついた、古今の若き王位継承者や殉教者の苦難や栄光についての記述があり (189-410)、ここには七人の息子と母をはじめ、聖エウラリアなどの残虐な拷問に耐えて信仰を貫いたことで知られる幼い殉教者も含まれている。E.Cole, *The Young Schollar's Best Companion* (1690) は、食前食後の祈りや行儀作法、ABC から算術までを含む包括的な教科書であることを表紙で謳っているが、「カトリック圧制下における殉教」と題した殉教者列伝を含む (111-125)。
- 27) Haller, *Foxe's Book of Martyrs*, 13-14. 16、17世紀に出版された版については、John N. King, *Foxe's Book of Martyrs and Early Modern Print Culture* (Cambridge: Cambridge UP, 2006) 92-161 参照。

- 28) David Scott Kastan, "Little Foxes," *John Foxe and his World*, ed. Christopher Highley and John N. King (Aldershot: Ashgate Publishing, 2002) 117-129.
- 29) Eirwen Nicholson, "Eighteenth-Century Foxe: Evidence for the Impact of the *Acts and Monuments* in the 'Long' Eighteenth Century," *John Foxe and the English Reformation*, ed. David Loades (Aldershot: Ashgate Publishing, 1997) 169.
- 30) Hunt, *Children's Literature*, 23.
- 31) Kastan, "Little Foxes," 125.
- 32) Humphrey Carpenter and Mari Prichard, *Oxford Companion to Children's Literature* (Oxford: Oxford UP, 1984) 190.
- 33) White, *Tudor Books of Saints and Martyrs*, Ch.VI.
- 34) John R. Knott, *Discourses of Martyrdom in English Literature, 1563-1694* (Cambridge: Cambridge UP, 1993) 22.
- 35) フォックスはこの辞世の唄をロジャーズと同年の1555年に殉教したロバート・スミスが残したものとしており、議論の分かれるところである。
- 36) Sloane, *Children's Books*, 8, 28-43. 作法書については、Darton, *Children's Books in England*, 45; Bingham and Scholt, *Fifteen Centuries of Children's Literature*, 55 参照。
- 37) Judith Gero John, "I Have Been Dying to Tell You: Early Advice Books for Children," *The Lion and the Unicorn* 29 (2005) : 57-61; Andrea Brady, *English Funerary Elegy in the Seventeenth Century: Laws in Mourning* (Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2006) 200-201.
- 38) Margaret Spufford, *Small Books and Pleasant Histories: Popular Fiction and Its Readership in Seventeenth-Century England* (London: Methuen & Co., 1981) 201-203.
- 39) Tessa Watt, *Cheap Print and Popular Piety, 1550-1640* (Cambridge: Cambridge UP, 1991) 99-101.
- 40) *A Critical History of Children's Literature*, 38.
- 41) *Oxford Companion to Children's Literature*, 190. 児童文学にみられる残虐性については、Maria Tatar, "Violent Delights' in Children's Literature," *Why We Watch: The Attractions of Violent Entertainment*, ed. Jeffrey H. Goldstein (Oxford: Oxford UP, 1998) 69-87.
- 42) Hunt, *Children's Literature*, 21.
- 43) Thomas Fuller, *Good Thoughts in Bad Times* (Boston, 1863) 75.
- 44) C. John Sommerville, *The Discovery of Childhood in Puritan England* (Athens: U of Georgia P, 1992) 63; Sloane, *Children's Books*, 52.
- 45) Charlotte Elizabeth, *Personal Recollections* [1841] (Charleston: Biblio Bazaar, 2008) 20-21.
- 46) Annie Besant, *An Autobiography* [1893] (Gloucester: Dodo P, 2007) 22.
- 47) Miriam Elizabeth Burstein, "Reviving the Reformation: Victorian women writers and the

Protestant historical novel," *Women's Writing* 12 (2005) : 74-75. ローズ・アリンの小説については、Burstein, "Reinventing the Marian Persecutions in Victorian England," *Partial Answers* 8 (2010) : 341-364 参照。

第2章

海賊冒険譚のなかの背教者伝

—— フランシス・スピラと『海賊シングルトン』 ——

海賊の自叙伝

ダニエル・デフォー（Daniel Defoe: 1660-1731）の『海賊シングルトン船長の生涯と冒険』（*The Life, Adventures and Piracies of the Famous Captain Singleton* [1720]. 以下、『海賊シングルトン』と略記）¹⁾の主人公は、二歳の頃、人さらいに誘拐されてジブシーの女に売られ、この女の死後、大工に弟子入りするが、造船の手伝いに駆り出された際、依頼主の船長に気に入られて船乗りとなり、十二歳になるかならぬかで航海の旅に出る。自らの半生を振り返る自叙伝の形式を借りて一人称で語られるのは、ポルトガル船の船員たちの反乱をきっかけに船乗りから海賊へと転身、反乱分子たちと共に置き去りにされたマダガスカルから脱出すると、アフリカ大陸を横断、乗っ取った船で大洋の覇者となるシングルトンの、奇想天外な冒険の数々である。この物語に筋書きらしい筋書きはないが、後半にはひとつの内面劇が用意されている。すなわち、主人公の回心である。

誘拐され、孤児同然となったシングルトンは、幼い頃から保護者同然であった老人を殺害しようと虎視眈々とその機会をうかがう悪童であり、彼自身の言葉を借りるならば「根っからの盗人」（“an original Thief” [140]）である。悪行の限りを尽くし、海賊業に精を出すシングルトン船長であるが、ある日未曾有の大嵐に見舞われ、雷が船を直撃する。すさまじい稲光と雷鳴に襲われて放心状態のなか、かつてない恐怖を味わった彼は、これまでの罪深い自身の生き方を初めて自覚するのである。「この瞬間、自分は天によって永劫の破滅に沈められる運命にあると思った」（“I thought my self doom'd